劇場版組の2人の生死を逆にしてみた

rockless

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

劇場版の登場人物のユナとエイジ。その２人のアインクラッド編においての生死が逆になるようなストーリーに変えてみただけの話

目　次

短編です ―――――――――――――――― 1
その後のお話　～圏内事件・前編～ ―――――――― 12
その後のお話　～圏内事件・後編～ ―――――――― 21

短編です

「私が敵の注意を引きます!!」
　４０層攻略中、閉じ込めトラップにかかったプレイヤーたちの救助活動中に、敵モンスターの増援が現れて救助に向かった私がいる部隊も包囲されてしまった。このままでは全滅してしまうと思った私は、自らが囮となることを選んだ
「ユナ止めろ!!」
　リアルでの幼馴染のノーチラス、いや鋭二の制止を振り切り、私は部隊から離れて『吟唱』スキルの中の、敵のターゲットを集める効果のあるものを発動させた
　その瞬間、部隊を包囲していた数十体のモンスターが私の方を向いた
　ハハハ・・・みんなを助けるためだけど、やっぱ死ぬのは怖いな・・・
「ユナー!!」
　鋭二の叫ぶ声が聞こえる。モンスターの間から鋭二の姿もチラっと見えたけど、どうやら助けてはくれないみたい
　あぁ・・・私、本当に死んじゃうんだ・・・
　前も後ろも、右も左もモンスターたちに囲まれ、モンスターたちが私への攻撃を始めようと動き出した
　死にたくない・・・死にたくないよ・・・
　気付けば涙が両頬を伝っていた。目の前に攻撃が迫り、反射的に目を閉じる
　サヨナラ・・・
「～～～ッ!!!」
「え？」
　モンスターの悲鳴が聞こえ、私は閉じていた目を開けた
　どこかから飛んできたであろうハルバードが、目の前にいたはずのモンスターを縦に両断して、地面に突き刺さっていた。そして、そのハルバードの上に、モンスターたちを跳び越えて器用に乗った少女が１人

「ナイスガッツ。後は任せて」
鋭二が所属している血盟騎士団の女性用の制服の、白い部分を黒に置き換えたような服を着ている少女・・・彼女はそう短く言うと、地面に降りてハルバードを持ち上げる
「伏せて！」
少女の指示に最大速度で応えて体勢を低くすると、私の頭上をハルバードの穂先が通った。直後に再びモンスターの悲鳴が聞こえる
「今安全な場所に送るから」
少女はそう言うと、私の服にハルバードのピックを引っ掛けた
「え？」
「姉さん!!」
そして、私を思いっきりブン投げた
「ひゃあああああっ!!!!」
「よっと、確保」
投げ出され、悲鳴を上げた私はすぐに誰か女性に抱き止められてキャッチされた
でも、ちょっと待って・・・私は助かったけど、それじゃああの子は1人であの数のモンスターに囲まれて・・・
助かったという安堵の気持ちが湧き上がると同時に、私を助けてくれた少女の無事が心配になる
私の軽はずみの行動のせいで、誰かを死なせてしまうなんて・・・
「わ、ちょっと！」
「放して!!私のせいであの子が!!」
助けに向かおうと思い、女性の腕の中から出ようとするが、女性は私を放そうとしない。そうしている間にも、モンスターたちは少女に群がっていく
「大丈夫よ・・・あの子は、私の妹は・・・」
女性が優しい声で、私に語りかけた次の瞬間、群がっていたモンスターたちが一斉に弾け飛び、消滅した
「最強なんだから」
モンスターの消滅エフェクトの中で、ハルバードを構えた少女が1

人立っていた
「姉さん、状況は？」
「敵モンスターの殲滅はほぼ完了で撤収に入ってる。一旦町に戻って、レイドパーティを再編成して、明日再度フロアボス攻略を行う予定」
　構えを解き、ハルバードを肩に担いで歩いてくる少女の言葉に、彼女の姉だと思われる私を抱き止めていた女性が答えた
「そっか。じゃあ私たちも帰ろうか」
　っとそこで、少女が私のほうを向いた
「さっきはありがとう。あなたが敵を一箇所にまとめてくれたから、私の力が最大限発揮できて敵を殲滅できた」
「あの、いえ、私のほうこそ、助けてくれてありがとう・・・」
　命がけで部隊を助けようとしたのに、逆に助けられて恥ずかしい・・・
　少女からのお礼を言われ、私もお礼を返す
「ただ、攻略組で短剣スキルは止めたほうがいいと思うよ。扱いやすさという利点以上に、リーチの短さが致命的だから。扱いやすいが故に、確かなプレイヤースキルが必要になる。度胸だけじゃ命がいくつあっても足りないよ」
「はい・・・」
　少女からの忠告で、自分の無力さと無計画さを思い知らされた
　私、甘かったんだな・・・吟唱スキルがあるから、攻略組の力になれるって思ってたけど、自分の身も守れないんじゃ・・・
「でもね、できればこれからも攻略組にいてほしいって私は思うから。出る杭を打つつもりもさらさらないよ。吟唱スキルがあれば、作戦の幅も広がるし、ねえ、姉さん？」
「うん、そうだね」
　落ち込んだ私を気にしてか、励ましてくれる少女とそのお姉さん
　もうダメダメだ、私・・・落ち込んだフォローまでされて・・・
「スキルや装備選びなんかは相談に乗るし、最前線で実戦経験を積むのも協力するよ。少ない女子の攻略組だもん。仲良くしよ？」

「はい、よろしくお願いします」
強くなろう・・・この人の下で・・・
・
・
町に戻り、2人とフレンド登録をして別れた
ハルバードを投げた人はリリィという名前、お姉さんのほうはアスナという名前で、2人とも血盟騎士団の所属らしい。アスナは血盟騎士団の副団長をしているらしく、リリィはフォワード隊のエースなんだとか
「ユナ!無事でよかった・・・ほんとよかった・・・」
「鋭・・・ノーチラス」
私が1人になったところで、鋭二が声をかけてきた
「ごめんね。心配かけた」
そう、口には出した瞬間、私は、頭の中にあのときのモンスターの間から見えた鋭二の姿と、『助けに来てくれなかったくせに』っという言葉が浮かんだことに驚いた
「ユナ?どうかしたか?」
「え?ううん、なんでもないよ」
いつもと変わらないはずの鋭二なのに、彼に対して明らかに不信感を抱いている私がいた
あれ?私ってこんな根に持つ性格だっけ・・・?
「それより、疲れたから、今日はもう宿で休むね」
「あ、あぁ、わかった・・・」
たぶんこのとき、私と彼の歯車は狂い始めたのだろう・・・全てが終わったときの、後の私はそう思った

あれから2ヶ月経った
私はリリィたちの協力あって、攻略組として少しずつだが力を付けていっていた。吟唱スキルもあるおかげで、フロアボス攻略にも参加させてもらえている

スキルは吟唱スキルを最大限に生かす方向で組み立てた。短剣スキルはそのままに、新たに投剣スキルを取得して、中距離の牽制を行えるようにした。投剣で麻痺薬を塗ったナイフを投げて敵を麻痺させることで、逃げる時間や仲間の救援の到着までの時間を稼いだりできる

そんなある日のこと

「ユナ、血盟騎士団に入る気ない？」

リリィから、ギルドに誘われた

「実はね、新たな部隊を作ることになったの。遊撃を目的に、私が隊長、姉さんが副隊長兼指揮官をすることが決まってる。他のメンバーはこれから決めていくんだけど、まず、ユナに入ってもらいたいの」

「私に・・・？」

「うん。正直言うとね。ユナの吟唱スキルを、より効果的に使う為の部隊を作りたいんだ。だからユナに断られちゃうと計画を一から練り直さないといけなくなっちゃう」

私のための部隊・・・

「本当に、私でいいの・・・？」

「私や姉さんは、団長から部隊設立の指示を受けたとき、真っ先にこれを思いついた。それくらい、あなたと一緒にできたらと思ってる」

「ありがとう。嬉しい・・・」

「じゃあ決まりでいい？」

「もちろん」

私はリリィの誘いを受け、血盟騎士団に入った

その年の１２月２４日

リリイたちの遊撃部隊は無事新設された。直後のフロアボス攻略でも成果を残すことができた。私も吟唱スキルを使って、味方の支援や取巻きモンスターの引き付けなど、何とか足を引っ張らないように頑張った

久しぶりに、鋭二からメッセージが届いた。鋭二とは４０層の一件

から関係がギクシャクしたままで、最近は会うこともなくなっていた
　メッセージの内容は、２人で４７層のフラワーガーデンに行こう、というものだった。つまりはデートのお誘いかな
「ユナ！」
「ノーチラス、待った？」
「いや、大丈夫だ」
　４７層の転移門の前で待ち合わせをした私たちは、街から出てフラワーガーデンに向かう
　時間を置いたから、元通り話せる・・・よかった
　前と同じように普通に鋭二と話すことができる自分に、内心でホッとした
・
・
　デートは恙無く進み、夕方
「そろそろ寒くなってきたし帰ろうか」
「そうだな」
　いくら花が咲き乱れる暖かい環境の４８層とはいえ、１２月の気候設定のため、日が落ちてくるにつれて肌寒くなってくる
「その前にユナ、話があるんだ」
「話？」
「好きだ、ユナ・・・付き合ってほしい」
「え？」
　突然の告白に、私は驚いた
「ずっと好きだった。現実で一緒にいるときから、ずっと・・・」
　嬉しさが胸いっぱいに広がっていく。と同時に、なぜかあのとき、４０層のあの一件での、助けてくれなかった鋭二の姿、そして助けてくれたリリィの姿が思い起こされた
「２人でどこかゆっくりできるところで落ち着こう？ってそれじゃ結婚するみたいだな。ハハハ・・・」
「そうだよ。私たちは攻略組なんだから、落ち着いてなんていられないよ」

「ハハッ・・・攻略組か・・・」
　その瞬間、それまでの穏やかな空気が、急に変わった
「なぁユナ・・・俺たちが攻略組にいる必要ってあるのか？団長や副団長たち、他のギルドの攻略組にソロのプレイヤーもいる。俺たちがやる必要なんてないじゃないか」
「鋭二・・・？」
　そこでふと気付いた。私は彼と同じ血盟騎士団に入ったのに、今までギルド本部でも、攻略会議でも、日々の迷宮区攻略でも、１度として彼を見たことが無かったことを
「４０層のあの事件と同じ日、俺は団長から二軍に落とされた。なにがナーヴギアとの適合不具合だ！そんなことで今までの俺の努力を全て否定しやがって!!」
　どんどん態度が粗暴になっていく鋭二に、私は見ていられなくなって、視線を逸らした
「それでも、ユナが攻略組になったから、頑張ったんだ！もう一度一軍に戻れるようにって！でもダメだった！新しくできた遊撃部隊のメンバーにもなれなかった・・・あの２人に土下座までしたのに・・・」
　そんなことまで・・・
　あの２人とはリリィとアスナのことだろう。しかし、彼女たちは攻略に関しては徹底してドライであった。精神論や感情論を一切挟まない、完全な合理主義を貫く彼女たちに、そんなやり方で直訴しても無意味なことは目に見えていた
「ユナ・・・一緒に攻略組を辞めて、中層で一緒に暮らそう？ユナが危険な目に遭うことないじゃないか。あいつらはユナのスキルだけが目当てで、利用してるだけなんだ」
　鋭二が私の両肩を掴んで迫ってくる
「鋭二・・・ゴメン。私は、攻略組を辞めるつもりはないよ。だから鋭二とは付き合えない」
「ユナ・・・？」
　私の拒絶に、鋭二はガックリと膝をついた。私の肩を掴んでいた手も、力が抜けてダラッと降りていった

「じゃあね、鋭二」
もう話すことはなく、場の空気に耐えられなかった私は、鋭二に背を向けて帰ろうとした
悲しいな・・・友達を失うのは・・・
そう思いながら、街へ戻る為に3歩目の足を出そうとしたときだった
「え？」
急に、体のバランスが取れなくなり、私の体が地面に倒れた
原因はすぐにわかった。視界の左上のＨＰバーが1割ほど削れ、その下に麻痺のアイコンが出ていたのだ
「鋭二・・・どうして？」
視界の端に見える、剣を構えた鋭二。そのカーソルはオレンジに変わっている。麻痺の状態異常になったのは、あの剣に麻痺薬が塗られていたからだろう
フラワーガーデンは花が咲いていて綺麗な場所であるが、一部ではモンスターの出る場所もあるれっきとした圏外であった
鋭二はうつ伏せに倒れた私を、腕を掴んで仰向けにして自分のほうへと顔を向かせた
「ユナが・・・ユナが悪いんだ。こんなにもずっと想ってたのに・・・」
「や、やめて・・・」
殺されるの私・・・どうして・・・イヤだよ・・・
そう言って、鋭二は剣を上に振り上げた
私は逃げようともがくも、麻痺した体は全く言うことを聞いてくれず、なにもできないでいた
誰か・・・助けて・・・
鋭二が私に剣を振り下ろそうとした、その時だった
「ガッ・・・」
いつかのように、ハルバードが飛んできて、鋭二の体を貫いた。ハルバードは鋭二の体の中に柄を通したまま、鋭二の後ろの地面に突き刺さる
そして、ジャリ・・・ジャリ・・・っと私たちに近付いてくる足音

が1つ
「なぜお前がここにいる?!」
「なぜ、か・・・その前に改めて自己紹介しておこうかな。私はリリィ、血盟騎士団の犯罪や規律違反を取り締まる憲兵隊、通称『黒制服』の隊長を務めている」
リリィはそう言って、自分が着ている黒い制服を示した
「憲兵隊、だと?そんなの」
「聞いたことがないだろうね。知ってるのは創設メンバーの中の、幹部以上のプレイヤーだけだから。姉さんも知らないよ。それよりいいの?ＨＰは減り続けてるよ?」
リリィに言われて、鋭二は慌てて自分に刺さったままのハルバードを抜こうと掴んだ。しかし、ハルバードは動かない
「あ、え、なんで・・・」
「おっとしまった。あなた程度のレベルじゃＳＴＲに全振りしてても、そのハルバードはビクともしないんだった」
「なっ?!ふざけんな!!」
そんなやり取りをしている間に、鋭二のＨＰバーはレッドゾーンに入るほど削れていた
「血盟騎士団二軍ノーチラス、ギルドの名と攻略組の奮闘に泥を塗った犯罪者よ」
ゾッとするほどの冷たい声を、リリィは鋭二に突きつけ、私はこの後のことがわかってしまったために、目を閉じた
「死してその罪を償え」
「この、人殺しがぁあああ!!!」
鋭二の断末魔の叫びと、アイテムなどのオブジェクトが消滅する音が聞こえた
やがて、辺りはシンッと静まり返り、私が目を開くと、そこに鋭二の姿はなく、リリィと地面に刺さったハルバードだけだった
「ハァ・・・そんなの今更だよ」
リリィは小さく呟いて、ハルバードを地面から引き抜いた。そしてストレージから1本のポーションを取り出して私のほうへやってく

る
「ユナ、大丈夫？これ、麻痺解除ポーションだから」
私の上体を起こして、ポーションを飲ませてくれたことで、麻痺が治り、体の自由が戻る
「・・・ありがとう」
私は立ち上がって、短くお礼を言った。このお礼が。ポーションのことを言っているのか、その前のことも含めてなのか、言っている自分でもわからなかった
「・・・送っていくよ、街まで」
「うん・・・」
・
・
「ねえ、その・・・今までも、人を殺したりしてたの・・・？」
街までの道すがら、沈黙に耐え切れなくなって、どうしても気になっていたことを聞いた
「そうだよ・・・規律違反はまだしも、犯罪者の取締りに関しては、ギルドの内外を問わないから、レッドプレイヤーとも何度もやりあってる。もう、両の手で数えられないくらい手にかけた」
「どうしてリリィが・・・？」
「代わりがいないから、かな・・・レッドプレイヤーに負けない強さをもっていて、尚且つ絶対に自らが犯罪者に成り下がらない覚悟を持った人が・・・私は、レベルだけで言うならもう団長より強いし、姉さんがいるから絶対にギルドを裏切れない」
「辛くないの？」
「もう慣れたよ」
そう言ったリリィの横顔は、ガラス細工のように、ほんの少しの衝撃で壊れてしまいそうだった。もし私が、鋭二を殺したことを少しでも責めたら、きっと彼女の精神は壊れてしまって、再起不能になってしまうのではないかと思ってしまうくらいだ
「今回のことは、できれば他言無用でお願い。憲兵隊の活動は水面下で行ってるから、存在がバレると支障が出るから」

「うん、わかった・・・ねえ、１つだけ聞いていい？」
「なに？」
「４０層でのあの一件、私を助けてくれた理由を教えて」
今だからわかる。『人を助けるのに理由なんていらない』という精神論は、リリィには存在しない。絶対に本人に利があるから私を助けたはずだ
「理由は、色々ある・・・ユナにとって好ましいのも、好ましくないのも・・・単純に経験値を大量獲得できるとか、あんな死に方をされたら味方の士気がガタ落ちで再起に時間がかかるとか」
「吟唱スキルの使い手を確保したかったとか？」
「それもあったよ。珍しいスキルだし、攻略組に入るんだったら、他のギルドには渡せないとも思った」
「そっか・・・正直だね」
――あいつらはユナのスキルだけが目当てで、利用してるだけなんだ
リリィの言葉に、さっきの鋭二の言葉を思い出す。そう、鋭二の言っていたことは間違っていない。そんなのわかっていたことだ
「もし、納得がいかないのなら、脱退してもいい。今回の件もあるから私たちに止める権利はない」
「ううん、私は辞めないよ」
でも、それでもいいんだ・・・例えスキルが目当てだろうと、利用されていようと、攻略組（こ）で戦うことが私の目標だったのだから・・・
「リリィ・・・助けてくれて、ありがとう」

その後のお話　～圏内事件・前編～

２０２４年３月
　ある日、最前線のフィールドボス攻略会議が行われていた
「ボスを町の中に引き込み、ＮＰＣを襲っている間に攻撃を・・・」
「ダメだ！そんなことをすればＮＰＣが」
「死ぬ、とでも？」
　姉さんが示した作戦に、異議を唱える１人の剣士。彼は攻略組としては珍しく、ギルドに所属していないソロプレイヤーのキリトだ
　彼の異議を姉さんは一睨みして黙らせた
「ＮＰＣは死んでもリポップするだけです。犠牲にしても問題ないでしょう」
「だけど！」
　諭すように言う姉さんに、食い下がるキリト
　２人の口論はしばらく続き、攻略会議の進行が中断してしまう。そんな光景に周囲に呆れとため息が広がっていった。私もそんな１人であり、ため息を１つ吐き、目の前に広げてあるマップに目を落とした
「リリィ？何か気になることでもあるの？」
　そんな私の様を傍にいるユナが気付き、話しかけてきた
「そうだね。今回のボスと町の配置についての意味が、ちょっとね。システム的な点でもシナリオ的な点でも・・・」
「どういうこと？」
「システム的な点っていうのは、この配置をゲームとして見た場合の話で、ボスの行動範囲内に都合よく町があるなんて『どうぞ囮に使ってください』って感じがするじゃない？なら、シナリオ的、つまりこの町が、どうしてこんなところにあるのか。あるいはいつボスがここに住み着いたのか。ボスについてこの町のＮＰＣはどういう考えを持っているのか・・・とか、そういう歴史みたいな感じ。当然、ボスが先に住み着いてたなら、こんなところに町を作ろうなんてＮＰＣは思わないはず」

「確かに・・・」
実際、攻略作戦を立てる段階で、この辺りのフィールド調査を行っているので、この町にも足を運んでいる
あの時、思ったのは・・・
「あの町って、若い人が少なかった気がする」
「そうだね。空き住居も多かったし、ボスが住み着いたから、若い人は大きい街に逃げていったのかな？」
「っと考えると、ボスがいなくなると、若い人が戻ってくる可能性があるね。それで人口が増えると、圏外だった町が圏内になったり、あとはＮＰＣ商人の店も増える・・・なんて」
「それでその商人が、今いる商人よりいいものを売ってくれたなら・・・」
っとユナとマップを見ながらそんな話をしていると、周囲からの視線を感じたので、顔を上げると姉さんやキリト、他プレイヤーが私たちに視線を向けていた
「何？」
「いや、何って・・・」
「ユナと話してたのは、全部『そうだったらいいな』的な話だよ。だから私は姉さんの作戦に異論はないよ。ボスを倒したからって、そんなすぐに町に活気が戻るわけじゃないだろうし、戻った頃には私たちはもうこの層にはいないだろうから。安全確実に倒せるなら、それに越したことはないよ」
私たちが攻略するのは、現実に帰るためであって、ＮＰＣに感謝されるためではないのだから・・・

それから1ヶ月とちょっと経った4月下旬。現在５９層攻略中
「ちょっと！昼寝なんてしてないでダンジョンに潜るなりしたらどうなの？」
「今日は1年でもっとも気持ちいい気候設定の日だ。こんな日は昼寝しないなんてもったいない」

街から迷宮区に向かう道すがら、木陰で昼寝をしていたソロの剣士ことキリト。そんな彼に姉さんは食って掛かっていた
私とユナはそんな2人に、『喧嘩するほどなんとやら・・・』っと優しい目で見守っていた
「あんたらも寝てみたらどうだ？風が気持ちいいぞ」
「・・・」
キリトの言葉に姉さん黙るとともに、フワッと風が吹いた。キリトの言うこともわかる気がした私は、ユナに『どうする？』っと視線を投げかけてみると、彼女は笑顔でコクリと頷いた
あぁ、こんなゆっくりとできる時間がとれるなんて、いつぶりだろう・・・？
・
・
2時間経った
「う、う～ん・・・」
先に寝ていたキリトが目を覚ました。そして体を起こし、隣で寝ている姉さんの姿を見て驚いた。すぐに周りを見回して、私と目が合った
「あんたは寝なかったんだな」
「そりゃあ誰かは起きてないと危ないからね」
そう言いながら、膝枕してあげているユナの頭を撫でる。ユナにはノーチラスの一件からこっち、黒制服として活動する時に、姉さんの相手をしてもらったり、ダミーの理由として使ったりしている
「それに、こんな何もしない時間なんて久しぶりすぎて、眠るのがもったいなくて・・・」
「どんだけ廃人プレイしてんだよ・・・レベルだけならヒースクリフより上って噂は本当なのか？」
「んー、どうだろう？団長のレベルは聞いたことがないからね」
キリトの疑問に、私は笑って誤魔化す
「でも、1つだけ言えることは、モンスターと向かい合って、生きるか死ぬかのときは、全てを忘れられる・・・不安も、恐れも、嫌な記憶

も・・・」
「あぁ、わかる・・・」
　私の言葉に、キリトが少し俯いた。攻略組のプレイヤーで人が死ぬところを見たことがない人なんていない。みんな後悔や悲しみを背負っている
　彼の過去の行動は黒制服の活動の一環で調査している。去年の６月に、入っていたギルドのメンバーが、彼を除いて全滅している。その後、『蘇生アイテムがドロップする』という噂のクリスマス限定のイベントボスをソロで討伐するも、蘇生アイテムは死後１０秒間しか機能しないものだったという
「戦ってるときだけは、私は自由なんです」
「そうか・・・」
　そう言って、彼は優しげに笑った
「あなたは、どうして攻略組に？」
「俺は・・・」
　私の質問に、彼は少し考える素振りをして、口を開いた
「約束を果たすため・・・生きて、この世界の最後を見届ける。そして、この世界が生まれた意味を、俺がこの世界にいた意味を、見つける・・・そのために、俺は攻略組（こ）で戦ってる」
「そっか・・・」
　彼の理由を聞き、なるほどっと思った。別に彼の理由に共感したわけではない。単純に、私の戦う理由を聞いた彼が、優しげに笑った理由がわかったのだ
「それで、その約束した子とは、どこまで？」
　重い話ばかりだと雰囲気が暗くなるので、ついでとばかりに、気になったので聞いてみる。誰と交わしたのかは知らないけど、そんな約束を交わす相手は当然女の子だろう。男の子という可能性もなくはないけど、どうだろう？私も嫌いではないけどね
「どこまでとは？」
「キスとか？」
「キッ?!」

彼の顔が赤くなった。声を上げそうになったが、姉さんやユナが眠っているので、なんとか止まった
「まさか、付き合っていなかったと?それとも逆に、もう・・・」
「してないから!」
「ふーん。まだ童貞っと・・・」
「ど、ど、童貞ちゃうわ!」
先ほどまでの暗い雰囲気を吹き飛ばすように、からかい、笑う
「も、もう俺は行くからな!」
「えー、まぁまぁ、もうちょっと話そうよ」
逃げるように立ち上がった彼を私は引き止める
「こんなバカみたいなやり取りするのも、久しぶりなんだからさ」
「・・・ったく」
あぁホント・・・こんな楽しいのは久しぶりだ・・・
・
・
さらに時間は過ぎ、夕方になった
「クシュン!!」
キリトと内容のない話をしていると、姉さんがくしゃみをして目を覚ます。寝惚け眼で辺りを見渡し、ここが外であることを認識した瞬間、口元に草を付けたままの表情がハッと引き締まった
「おはよう、姉さん。口元に草の葉が付いてるよ」
「なっ、もう、起こしてよぉ・・・」
顔を真っ赤にして恥ずかしがる姉さんに、ホッコリとする
「ゴメンゴメン。こっちもおしゃべりに夢中になっちゃってて」
「もう・・・1日無駄にしちゃったじゃない」
「まぁまぁ。それじゃ、どこかで食事をして、宿に帰ろうか」
姉さんを宥めながら、膝枕しているユナを起こす
「じゃあ、俺も宿に帰るかな・・・」
「じゃあね。またいつか、今日のようにゆっくり話せたらいいね」
「それはゴメンだ・・・またな」
立ち上がって去っていこうとするキリトに、手を振って見送ってい

る私。そんな私を見て、姉さんがニヤニヤとしている
「ねぇ、もしよかったらなんだけど、一緒にご飯とか、どう？」
「は？」
・
・
・
気が進まないキリトを、姉さんが押し切るようにして、５３層のレストランへ
「あ、そうだ、忘れないうちにお礼を言っておくね。私たちが眠っている間、傍に付いててくれてありがとう」
「いや、別に俺がいなくても、リリィが起きてたから・・・」
「でも女の子だけと、男の子がいるのじゃ、違っただろうからね」
ねぇ、リリィ？っと、キリトの隣に座らされた私に話を振る姉さん
最近は睡眠中に勝手にデュエルモードを起動しプレイヤーを殺す、なんて方法も出てきたから圏内でも昼寝なんてしないほうがいいんだよね。ホント、結構レッドプレイヤーを殺してきたはずなのに、まだいなくなんないの？
「それで、私たちが眠っている間、２人はどんな話をしてたのかな？」
「どんなって・・・キリトがまだ童て」
『キャアアアアアアッ!!!!』
リアクション早いよ!!ってか今のリアクション誰?!
外から聞こえてきた悲鳴に、店内にいたプレイヤーは騒然となる。私たち４人も、ご飯の途中であったにもかかわらず、店を飛び出して悲鳴の聞こえてきた方向へ走る
「こっちだ！広場でなにかあったようだ」
広場に着くと、２階建ての建物のバルコニーから、鎧を纏ったプレイヤーが首を吊られ、さらに槍が刺さっていた
「早くその槍を抜け!!」
キリトが鎧のプレイヤーに向かって叫び、姉さんは建物の中に突入した
「リリィ、ロープを!!」
「わかってる!!」

ユナの言葉と同時に、私の手からハルバードが放たれる
槍系ソードスキルの投擲技のシューティングスター。ユナを助けたこの技で、ロープは切断され、首を吊られていたプレイヤーは落下し、地面に衝突した
「今抜いてやるから」
「危ない!!」
駆け寄ろうとしたキリトを、ユナが引き止めたその瞬間。私が投げたハルバードがバルコニーの手摺りに当たって跳ね返って、鎧のプレイヤーに向かって落ちてきた
マズイッ!!急いで投げたからロープを切ったあとの軌道まで気が回らなかった・・・これは当たってしまう!!!
そう思ったときだった。バシンっと障壁が発生して、私のハルバードは弾かれた。そのコンマ数秒後、鎧のプレイヤーは死亡エフェクトとともに消滅してしまう
「死んだ・・・のか?」
「でも、圏内の障壁、出てたよな?」
野次馬が驚きで固まる中、私は地面に転がったハルバードを拾い、周囲を見回す。圏内で、私のハルバードを障壁で弾きつつ、且つダメージを受ける状態。それは・・・
「デュエルのウィナー表示を探せ!早く!!」
そう、デュエルしかありえない・・・
キリトの叫び声が広場に響き、野次馬たちは我に帰って周囲を見回した
しかし、表示を発見することはできなかった
「建物の中には誰もいないわ」
「どういうことだ・・・?」
「すみませんが、誰か今のを最初から見ていた人はいませんか?」
「あの、私・・・」
私が、野次馬たちに問いかけると、1人の女性が前に出てきた
「話を聞かせてもらえますか?私は血盟騎士団のリリィといいます」
「はい・・・私は、ヨルコです。カインズと食事をするために」

「ちょっと待ってください。あなたはさっきの消えた人と知り合いなのですか？」
被害者（？）のと思われる名前が出てきたことに、私は慌てて質問した
「はい・・・以前、同じギルドで・・・」
「ならまずフレンドリストでその人の所在を確認してください」
「え・・・？どういうことですか・・・？彼は今、ここで・・・」
「確認です。彼が本当に死んだのかどうか、という・・・」
圏内の障壁が機能していたが、デュエル相手は近くにはいなかった。ここにいる野次馬も、本当に死んだのかという疑問が拭えない。それを確認するには、1層の生命の碑で確認するか、フレンド登録をしているであろう人に、その人の所在を確認してもらうのが手っ取り早い
「・・・」
しかし、なぜか彼女はウィンドウを開こうとしない
「どうかしましたか？」
「その、していないんです・・・フレンド登録」
していない・・・？かつて同じギルドに所属していて、今も一緒に食事する仲なのに・・・？
私はヨルコさんの言葉に疑問を持った
「そうなんですか・・・なら、カインズさんの綴りを教えてください。生命の碑で確認するので」
「・・・わかりました」
私は、ヨルコさんから聞いたカインズさんの名前の綴りをメモし、あとのことを姉さんに頼んで、私とユナの2人で1層の生命の碑に向かった
・
・
「名前、消えてるね」
「そうだね」
生命の碑を見て、ヨルコさんの言った綴りの名前が暗く表示されて

いる、つまり死んでいることを確認した
「ま、これが本当にあのとき消えたプレイヤーの名前だったらの話だけど」
「だよね。普通は一緒に食事する仲ならフレンド登録するよね」
「しかも、フレンド登録すらしていないのに、綴りは覚えてるなんて怪しすぎる」
まるで、何かで必要だから覚えたようだ・・・
私も含め、ゲームの中ということもあり、現実では聞きなれない西洋風の名前を使っているプレイヤーは多くいるが、この世界は、名前の綴りを覚える必要はない。まず普通に生活していれば自分や他人の名前を書くことがない。それなのに名前の綴りを覚えるほどやり取りをする間柄なら、すでに、同じギルドに入っていたり、フレンド登録なりをしているだろう。つまり綴りを確認する手段はいくらでもあるわけで、結局覚える必要はないのだ
「ざっと見てたら、今カインズって読めると思う別の綴りの名前を見つけたけど・・・」
「ホント?」
「ホラこれ・・・しかも生きてる」
もしこっちがヨルコさんの知り合いのほうのカインズさんだったら?さてはて、何が目的なのかな?ヨルコさんからの聞き取りは明日することになっているけど、どう転ぶかな?
「よし、確認も終わったし、今日はもう宿に帰って休もう」
別の綴りのカインズの名前も一応メモに書き、上層に戻るためにその場を後にした

その後のお話　～圏内事件・後編～

次の日、ヨルコさんから聞き取り調査をする
「ねぇヨルコさん、グリムロックという名前に心当たりはある？」
姉さんは最初にそう質問する。昨日の夜、姉さんと宿で合流して、お互いが得た情報の交換は行っている。グリムロックとは、カインズさんが死亡した（ということになっている）ときに刺さっていた槍の製作者である
それにしても・・・昨日、私は『死亡したか確認してくる』と言ってあの場を離れた・・・なのに今日会ってもヨルコさんはカインズさんの生死を聞いてこない・・・姉さんは伝えていないから、知らないはずなのに、気にならないのだろうか・・・？
怯えた態度で姉さんの質問に答える彼女。しかし、食事を共にする仲のカインズさんの生死を心配していない。そんな矛盾が気になって仕方がない
「グリムロックさんは、私とカインズが昔いたギルドのメンバーだった人です」
「そのグリムロックさんが、カインズさんに刺さっていた槍の製作者なの」
「そんな、まさか・・・ということはやはりあの人は半年前のことを・・・」
「半年前に何があったのですか？」
そこから半年前の事件が語られる
半年前、レアドロップで敏捷が＋２０付与される指輪を入手して、その指輪を売ってお金にするか、ギルド内で使うかで揉めたらしく、最終的には多数決で売ることになり、リーダーのグリセルダという人が前線付近の競売屋に頼むために行ったのだが、その後行方知れず、生命の碑で死亡を確認したとのこと
あーうん、私その指輪持ってる・・・しかも４つも。しかも補正値は私が持ってるもののほうが高い・・・
手袋越しに、その指輪たちを触る。ちょっと気まずい思いをした私だった

「ちなみにグリムロックさんとは・・・？」
「彼は、グリセルダさんの旦那さんでした。もちろん、このゲーム内の、ですけど・・・」
　出た。このゲームの中で、なぜ存在するのかわからないシステム第2位。結婚したからといって、戦いの面で強くなるわけでもない。ストレージが共有化なんてされるせいで詐欺に使われ、結果として本当に好き合ってても、そのシステムを使用する人は少ないという意味不明さ。ちなみに第1位は倫理コード解除設定だったりする
「グリムロックさんが犯人なら、あの人は指輪売却に反対した3人を狙っているのでしょうね・・・」
　仮に彼女の言うとおりならば、凶器に自分が作った槍は使わないだろう・・・実際、こうやってヨルコさんが私たちと一緒にいるということは、犯人にとっては犯行のチャンスが潰されているわけだから、好ましい状況とはいえないはずだ・・・
「指輪の売却に反対した3人のうち2人は、私とカインズなんです」
「もう1人は？」
「シュミットというタンクです。今は攻略組の聖竜連合に所属していると聞きました」
　聞きました・・・？
「ちょっといい？そのシュミットさんという人とは、カインズさんとのように食事に行ったりはしていますか？」
「いえ、ギルドを脱退してからは1度も会ったり連絡を取ったりはいません」
　姉さんの質問を止めて、私が質問する
「それはカインズさんも？」
「はい・・・そうだと思います」
　連絡を取ったり、会ったりしていないのに、現在の所属を知っていると・・・？
「あの、シュミットに会わせてもらえませんか？きっと、まだこのことを知らないでしょうから・・・」
「その前に、もう1つ」

「なんでしょう・・・？」
「そのシュミットさんを、あなたはフレンド登録をしていますか？」
「いえ・・・さっきも言いましたが、シュミットとはギルドを脱退してからは1度も会ってませんので・・・」
　なぜそんなことを？という表情をして答える彼女。私は『そうですか』っと返して、姉さんに視線を送り、会話をバトンタッチする
　たまに、日常的に会う人より、たまにしか会わないような人をフレンド登録する人がいる。日常的に会うから連絡を取る必要もなく、逆にたまにしか会わないからこそ、所在がわかったり、連絡が取れたほうがいいと考えるのだけど、彼女はそれも否定した
「わかりました。シュミットさんを呼びましょう」
・
・
　姉さんとキリトがシュミットを呼びに言ってる間、私とユナはヨルコさんに付いて宿で待っていた
「今回の件、どう思ってる？」
「私はカインズさんは生きてると思ってる」
　ユナの問いかけに、私は推理を語る
「死んだとする場合、手段がどうにも説明がつかないんだよ。デュエルならカインズさん自身が降参をすれば継続ダメージは止まるし、首を吊られてた意味がわからない。既にあるトリックを組み合わせてやったなら、私のハルバードを弾いた理由が説明できない」
　圏内にいるプレイヤーを殺す方法は、過程の違いはあるものの、結局のところ2つしかない。デュエルモードを起動して圏内の保護を一時的に無効化して殺すか、圏外に連れ出して殺すかである
「私が知らないような、圏内の保護を突破するアイテムやスキルがあれば別だけどね」
「そんな反則みたいなもの、あるのかな？」
「どうだろうね」
　去年のクリスマスにキリトが手に入れた蘇生アイテムが、死後１０秒以内なら本当に機能するのならば、ありえるだろう

「死んでいないのなら、この事件っていったいなんなの？」
「例えば、グリセルダさんの死の真相を知るために、ヨルコさんとカインズさんが組んで起こしたものと考えると動機の説明はつく。レアアイテムを持ったギルドのリーダーが謎の死を遂げ、その後ギルドを脱退したメンバーが、どうやって強くなったか知らないが攻略組にいるわけだから」
「シュミットさんがグリセルダさんを殺して、レアアイテムを奪った・・・っとヨルコさんたちは思ってもおかしくないね」
「間違いなく、シュミットさんが来たら何か起こるだろうね」
　姉さんたちがシュミットさんを呼びに行き、『これから準備します』と言わんばかりに、1人にしてほしいと言って私とユナを宿の部屋に入れなかった彼女のことだ、必ず何か起こすだろう
「さて、何を見せてくれるのかな？」
　色々突っつきたいところはあるけど、あえて傍観に徹してみようかな・・・
・
・
「ヨルコさん!!」
　わーすごい・・・拍手を送りたい・・・
　目の前で起こっている事態に、私はそう思った
　シュミットさんを連れた姉さんとキリトが宿にやってきて、ヨルコさんが取っていた部屋で話を聞くことになった。シュミットさんとヨルコさんは、恐怖と焦りを滲ませながら喧々とやり取りをしていた。やがてヨルコさんは発狂し、窓の傍まで移動し、そしてたった今、ヨルコさんの背中にダガーが刺さり、ヨルコさんは窓から外に落ちて死亡した、ということになっている
「後を頼む!!」
　キリトは遠くに見えた、ダガーを投げたであろうローブのプレイヤーを追って飛び出して行った
「あのローブはグリセルダのものだ・・・やっぱ俺たちに復讐しに来たんだ。ハハッ・・・幽霊なら圏内でＰＫするのもワケないよな・・・

アハハハ」
彼女の演技にすっかり騙されて、精神的にかなり追い詰められているシュミットさん。もうヨルコさんの劇場は終わったみたいだし、そろそろ発言しようかな
「シュミットさん、私から1つ質問です」
「な、なんだ・・・？」
私の言葉に、シュミットさんは酷く怯えながら返した。彼の前に昨日取ったメモを見せる
「ここに2つの名前があります。どちらもカインズと読めなくもない綴りですが・・・あなたたちと同じギルドにいたカインズさんの綴りはどちらですか？」
「え？あ、うーん・・・」
シュミットさんは差し出されたメモを手に取り、『どっちだったかな・・・』っと記憶を漁っていた
「スマン、わからない。名前の綴りなんて気にしたことないからな」
やがて、申し訳なさそうにそう言って、メモを私に返した
「気にしないでください」
綴りを知りたくて聞いた質問ではないですから・・・
私は返されたメモをクシャッと握り、姉さんに視線を向けた
・
・
シュミットさんを聖竜連合に帰したあとで、4人で集まって情報交換することにした。姉さん特製のサンドイッチを食べながら各々情報を出し、意見を交わす
「確かに、情報をまとめるとヨルコさんが怪しいのはわかる。でも彼女は死んだ」
「それがフェイクだとしたら？カインズさんも含めて」
「フェイクって、じゃああの時俺たちが見たのはなんだったんだ？どうやったのかわかったのか？」
「さぁ？でも他殺より、自殺の演技のほうがシステム的にはハードルが低いと思わない？」

今までの情報で推理した私の意見を話すと、キリトが大筋で納得しつつも疑問をぶつけてきた
「今、私が気になっているのは、今回の件にグリムロックさんがどれくらい関わっているのか、かな?ゲーム内とはいえ、奥さんを殺されているわけだし、真相を知りたいと思うはず」
「そういえば、武器の製作者がグリムロックってだけで、それ以外では半年前のことでは名前が出てくるけど、今回の件では出てこないな」
「普通なら奥さんの死の真相なんだから、元ギルドメンバーとはいえ人任せになんてできないよね」
「奥さんの死の真相を知りたくない理由・・・」
あるいは、もう既に知っている・・・?まさか・・・
「半年前の事件の犯人が、グリムロックさんだったなら・・・?」
「でもあの2人は夫婦だったって・・・」
「そこは夫婦だからこそ、じゃないかな?」
姉さんの否定の言葉を、ユナがそのまま返して否定する
「おい、待て。それが事実だったなら、死の真相は誰にも知られたくないんじゃないか?」
「でも、今回の件で彼は凶器となる武器の製作をした・・・つまりはカインズさんとヨルコさんの計画を知っている」
それはなぜか・・・そんなのは簡単だ
「今回の件を利用して、グリセルダさんの死の真相を探る人をまとめて殺すため・・・」
「あの3人が危ない!」
行き着いた結論に、私たちは焦る
「でも、3人の居場所が・・・」
しかし、焦ったところでどうしようもなかった
「あ、待って、ヨルコさんの所在ならフレンド登録をしたから」
「「・・・」」
「な、何?」
そんな中、姉さんの言葉に、姉さん以外の3人はジト目になった
フレンド登録してたなら言おうよ、姉さん・・・

・
・
これは、とんだ大物が来たものだ・・・
ヨルコさんたちがいたのは１９層の街の郊外だった。そして、彼女らを襲おうとしている殺人ギルドに、ＰＫＫとして少なくない数のプレイヤーを殺してきた私でも冷や汗が流れた。ＰｏＨ、ＸａＸａ、Ｊｏｈｎｎｙ Ｂｌａｃｋの３人。最凶最悪の殺人ギルド、笑う棺桶だったからだ
殺人ギルドが関わっている可能性が高いということで、ユナには血盟騎士団の本部に待機を指示し、さらにここに来るまでに黒制服の部下に召集をかけた。今は隠蔽状態で監視をしながら到着を待っているが、この相手とはできれば今はやりあいたくない
ここで変に突っついたら、今準備している一斉撲滅作戦がパーだもんね・・・
幸い、先に突っ込んでいったキリトが、うまく言葉だけで退けたようで、私はホッと一安心する。到着した部下に周囲を見張らせ、私もヨルコさんたちの所へ向かうことにする
「どうしてよグリムロック?!」
キリトたちに合流すると、ちょうど姉さんが連れてきたグリムロックさんを、ヨルコさんが問い詰めていた
「どうやら私が推理した通りのようだったみたいですね」
「ええ、ユナが言ってたこともね・・・」
グリムロックさん、否、グリムロックから半年前の事件の真相と動機が語られている。嬉しくないが私の推理は正解だった
グリムロックとグリセルダさんは現実でも夫婦だった。お互い何も知らないことはないくらいで・・・しかし、ＳＡＯに囚われて、彼女は変わったとグリムロックは言う
「要するに、嫉妬したわけですか。デスゲームにビビッてヘタレた自分は、いつか彼女に捨てられる、っと・・・そりゃそうだ、現実でどんな家庭を築いていたか知らないけど、いざとなったらヘタレる男、私だったらゴメンだし・・・」

恐らくだが、この夫婦に子どもはいない・・・そして、ＳＡＯに囚われていなかったとしても、子どもが生まれたら、近いうちに夫婦関係は破綻していただろう・・・その後、どういう結末になるかは、わからないが・・・

「みなさん、この男の処遇は、私たちに任せてもらえませんか・・・？」

カインズさんの申し出に、私と姉さん、キリトは顔を見合わせた。私としては処刑してやりたいが、グリムロックは一応カーソルがグリーンだし、姉さんの前で人を殺すわけにもいかないので、引き下がることにする

「わかりました」

３人とも異議はないみたいで、姉さんが代表して返事をし、カインズさんたちがグリムロックを連れて去っていった

「結婚か・・・ねぇ、君ならどうした？もし結婚して、その後に、相手の隠された一面を知ってしまったら・・・」

夜が明け、朝日が登る中、姉さんがキリトにポツリと質問した

「ラッキーだった、って思うかな？結婚するってことは、それまで見えていた面はもう好きだってことだろ？だから、その後に新しい面に気付いて、そこも好きになれたら・・・」

好きになれなかったら？という質問はするだけ無駄か・・・結婚した相手なら、好きなところも嫌いなところも、全てひっくるめて愛しているわけだから・・・

そんなことを思いながら、もうここには用はないので、街に向かって歩き出す。周囲の見張りをしていた部下に撤収の指示をメッセージで送り、ユナにもこれから帰る旨のメッセージを・・・

「リリィ!!」

「なに？急に大声出してどうしたの？」

一瞬強く風が吹いたが、気にせずメッセージを打ち込みながら歩いていると、姉さんが慌てたように大声で私を呼んだ

「あれ・・・って、あれ？」

姉さんはグリセルダさんのお墓があるほうを指差すが、そっちを見ても特に変わったところは見られない

「ユナが心配してるし、早く帰ろう？」
「う、うん・・・じゃあね、キリト君」
「あぁ」
　姉さんはキリトに手を振って、小走りで先を歩く私の隣までやってきた。そんな様子に、自然と顔がにやけてくる
　あらあら、ずいぶんと親しくなりましたね・・・姉さん？昨日は私とくっ付けようとご飯まで誘ったのに・・・
「え？なにかおかしかった？」
「ううん、別に・・・」
「もう、なによー・・・」